

「ヘシオドス『農耕と暦日』研究―「パンドラ神話における「希望」の意味について―

10H1044 工藤美乃

1. 本論考の主題設定

本論考においては、紀元前800年頃に活躍した古代ギリシアの叙事詩人ヘシオドスの『農耕と暦日』という作品を取り上げる。おもに『農耕と暦日』に収められている「パンドラ神話」の中の「希望」(エルピス)という概念に着目することによって、詩人ヘシオドスのもう一つの作品にあたる『神統記』とこの作品に共通する重要な「正義」(ディケー)という概念との関係性を考察していく。その上で、『農耕と暦日』を通底している「仕事」(エルガ)と「正義」(ディケー)との関係を把握することによって、詩人ヘシオドスが『農耕と暦日』をとおして、わたしたちにいかなるメッセージを伝えようとしたのかを明らかにする。

2. 「パンドラ神話」について

人間たちのために火を盗んだプロメテウスに対して怒り心頭に達したゼウスは、パンドラ (Pandora) という乙女を創らせて、贈り物として人間へ与えた。パンドラが与えられるまで、地上に住む人間の種族はあらゆる煩いや苦しい労働、病苦を免れ暮らしていたとされている。ところが、パンドラは数多くの災厄が詰まった甕の蓋を開いてしまう。甕から飛び出した災厄は人間たちに多様な苦難をもとらすことになった。その時に唯一甕の中に留まったとされるのが「希望」(エルピス)であった。「パンドラ説話」は「このようにゼウスの意図は、いかにしても避けることはかなわぬ」(『農耕と暦日』105行)という文言で締めくくられる。以上が、パンドラ説話の大筋である。

3. 代表的な先行研究とその批判的検証

本論考の第一章においては、上記の「パンドラ神話」において、甕の中に唯一残されたと言われる「希望」(エルピス)という概念の解釈をめぐって、ヘシオドス研究の代表的な三人の先行研究者、ゲットリング、シンクレア、廣川洋一氏の研究に論及する。これらの三人の研究者による「希望」(エルピス)という概念をめぐる基本解釈を批判的に検証していく。

ゲットリング (C. Goettling) によれば、「希望」(エルピス)は「空しい信頼関係」を構築するという理由から「希望」はその本質において悪であるとされている。けれども、甕の中に入っている「希望」(エルピス)を悪であるとするならば、瓶と一緒に入っていた他の災厄との関係に差が生じる。というのも、多くの災厄は甕の中から外に放出されて、外界にばらまかれたのに対して、「希望」(エルピス)だけは唯一甕の中に残されたとされているからである。「希望」(エルピス)が悪であると解される論拠にあたるものとして、ゲットリングは、古代ギリシア人の「希望」(エルピス) 観なるものに論及しているが、その内容も「希望が悪である」と解する論拠として十分であるとは決して言えず、説得力を欠いている。

これに対して、シンクレア (T. A. Sinclair) は、「希望」(エルピス)というものを本質的に善であると解釈している。つまり、「希望」(エルピス)は善きものであったがゆえに、人間には禁じられていたのだというのである。しかし、一方において『農耕と暦日』のある個所において、ヘシオドスは、以下のように歌っている。

食うものも十分でない貧窮の身で、人の寄る場所に坐りこむような男に

つきあう「希望」は、どうせろくな希望ではない。

(『農耕と暦日』500行～501行)

シンクレアは「希望」(エルピス)を善であると解釈している。そのように解釈した場合、当然にことながら、この個所中の「ろくな希望ではない」(ἐλπὶς οὐκ

ἀγαθὴ) という考え方との間に齟齬が生じることになる。しかし、シンクレアは、この点について、きちんとした説明を与えていないように思われる

これらの研究者たちに対して、廣川洋一氏は、「希望」(エルピス) というものについて、これを善であるか、あるいは悪であるということに二分するという考え方をとらなかった。この点については、論者自身も同意見である。その一方において、先に引用した一節中の「ろくな希望ではない」(ἐλπίς οὐκ ἀγαθὴ) については、廣川氏はこの箇所の「希望」(エルピス) は、ヘシオドスにとって、もはや「希望」(エルピス) にはあたらないと述べているが、この点にはやはり疑問が残る。

4. 「希望」(エルピス) の解釈をめぐって

これらの三人の代表的な研究者たちの「希望」(エルピス) の解釈の批判的検証をふまえて、以下では、ゼウスが「希望」(エルピス) のみを唯一、甕の中に閉じ込めたということの意味、先に引用した一節中の「ろくな希望ではない」(ἐλπίς οὐκ ἀγαθὴ) という個所における「希望」(エルピス) の意味に焦点をあてて、考察をすすめていく。

「パンドラ説話」における「希望」(エルピス) という概念について考察する場合に、極めて重要になってくるのは、すでにみてきたように「希望」(エルピス) のみが唯一、甕の中に「閉じ込められた」という側面である。この「希望」(エルピス) の「閉じ込め」は、明らかに、ゼウスの力による統御であるということである。さらに、甕の中にあつた「災厄が撒き散らされた世の中」というのは『農耕と暦日』中において有名な、いわゆる「五時代神話」に登場する「鉄の種族」(ヘシオドスの時代から現代人までをカバーすると思われる) の時代と一致するように思われる。以上の解釈が正しいとすれば、甕の中における「希望」(エルピス) の「閉じ込め」というのは、以下のように理解することができるのではないか。

ゼウスは人間への罰として、パンドラに甕の中の災厄を外界に撒かせた。だからと言って、詩人ヘシオドスは、ゼウスは人間を見捨てたとして、今の世の中に絶望しているわけではない。「希望」(エルピス)の「閉じ込め」という出来事は、つぎのように解するべきだろう。すなわち、ゼウスは「希望」(エルピス)を甕の中に閉じ込めることによって、これを人間たちに残してやった。けれども、今の世の人間は「正義」(ディケー)とは程遠い怠惰な生活を送っている。そのため、「希望」(エルピス)の益を与えるに値せず、これを自らの統御下においた。「希望」(エルピス)とは、人間社会において「正義」(ディケー)を実現し、その状態を継続させるために、人間たちが「仕事」(エルガ)に励み続けるための支えとなるものである。

5. 「正義」(ディケー)と「仕事」(エルガ)との関係

以上の解釈をふまえて、つぎに「正義」(ディケー)と「仕事」(エルガ)の関係について考察していきたい。

まず、先に引用した一節中の「ろくな希望ではない」($\epsilon\lambda\pi\iota\varsigma$ οὐκ ἀγαθὴ) という個所の $\epsilon\lambda\pi\iota\varsigma$ は、本来の意味における「希望」(エルピス)ではなく、むしろ「ろくでもない期待」というように解するべきである。廣川氏の解釈にあるように、ヘシオドスは $\epsilon\lambda\pi\iota\varsigma$ οὐκ ἀγαθὴ をその本質においてもはや「希望」(エルピス)でないとしたのではない。むしろ、ヘシオドスは善と悪の二種類の「希望」(エルピス)を想定していた。そのうち「悪」である「希望」(エルピス)は、怠惰で「正義」(ディケー)とは程遠い人間が持つ「ろくでもない期待」にあたるものである。これは、詩人ヘシオドスが「競合」(エリス)についても、善と悪の二種類の「競合」(エリス)を想定していたのと同じことである。かの有名な「五時代神話」において、ゼウスの「正義」(ディケー)を実現している人間の種族は存在していなかった。しかし、その一方において、「鉄の種族」にあたる今の世の人間たちには、

ゼウスの「正義」(ディケー)を実現する道が残されている。

ヘシオドスは、決して今の世に絶望しているわけではない。『農耕と暦日』は、遺産を不正に奪った弟ペルセスに対して、ゼウスの「正義」(ディケー)とは何たるかを説くという形をとってはいるものの、これはペルセスのみに宛てられたものではない。暴力を慎み、怠惰することなく、額に汗して時宜にかなった「仕事」(エルガ)に励むことによつてのみ、人間たちは「正義」(ディケー)を実現することができる。「正義」(ディケー)を実現した人間たちは「仕事」(エルガ)を続ける支えとなる「希望」(エルピス)を手にし、それを支えにして「仕事」(エルガ)に励み続けることによつて、ゼウスの「正義」(ディケー)が実現している状態を継続させることができる。

『農耕と暦日』において、ヘシオドスは、つぎのように歌っている。

だが、不死の神々は、優れて善きことの前に汗をお据えなられた、
それに達する道は遠く、かつ急な坂で、
始めはことに凹凸がはなはだしいが、頂上に到れば
後は歩きやすくなる——始めこそ歩きたい道ではあるが。

(『農耕と暦日』289 - 292行)

この引用箇所における「優れて善きことの前に据えられた汗」というのは、ゼウスの「正義」(ディケー)を実現するための「仕事」(エルガ)に他ならない。弟ペルセスのように、それまで怠惰に暮らしていた人間たちが「仕事」(エルガ)し始めるのは、決して容易なことではない。それは「歩きたい道」なのである。けれども、その「歩きたい道」を歩きやすくするもの、すなわち、ゼウスの「正義」(ディケー)の実現に向けて「仕事」(エルガ)をし続けるために人間を支え、道を歩きやすくするもの、それこそが「希望」(エルピス)なのである。

私たち人間は「希望」(エルピス)を支えにして「仕事」(エルガ)に励むことによって、神々に愛され、神々との関係を修復することができる。「怠惰な生を送る者に対しては、神も人もともに憤る」(『農耕と暦日』303行)とあることから、今の世の人間たちと神々との関係は、決してよいものとは言えない。神々との関係を修復するために、ゼウスが人間たちに唯一残した道—それこそが「仕事」(エルガ)なのである。

【主要参考文献】

廣川洋一『ヘシオドス研究序説』(未来社, 1975)

大学書林『ギリシャ語辞典』(1988)

廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』(講談社, 1997)

Sinclair, T.A. (ed.), *Hesiod Works And Days* (ARNO PRESS: A New York Times Company, 1979)